

なかのはらいせき

中原遺跡

— 中ノ原遺跡第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1195集

2013

福岡市教育委員会

題字は、福岡市南区在住の書家 珠 荷（辛川容子）氏の揮毫による

なかのはういせき

中原遺跡

— 中ノ原遺跡第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1195集



調査番号 1038
遺跡記号 NNH-5

2013

福岡市教育委員会

序

いにしえより大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、切土造成事業に先立って実施した中ノ原遺跡第5次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、奈良時代の堅穴住居や掘立柱建物を検出するなど多くの貴重な成果を挙げることができました。このうち堅穴住居に付設された竈は、往時のままの姿で検出されました。これは当時の住宅構造の一端とここに住まいした人々の生活を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、施工業者をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会が切土造成事業に先立って、2011（平成23）年2月1日～4月16日までに福岡市博多区西春町4丁目1番地で緊急発掘調査した中ノ原遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、堅穴住居跡をSC、孤立柱建物をSB、土塼をSK、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構・遺物の実測と製図は小林が行なったが、製図の一部は林田憲三氏の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影したが、全景写真は調査に委託してデジタルモザイク合成した。
6. 本書の執筆・編集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1038	遺跡略号：NNH-5	分布地図番号：13-2816
調査地籍：福岡市博多区西春町4丁目1番地		
工事面積：990m ²	調査対象面積：990m ²	調査実施面積：793m ²
調査期間：2011年2月1日～4月16日		

本文目次

序	
I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	3
II.調査の記録	7
1.調査の概要	7
2.堅穴住居	7
3.掘立柱建物	19
4.土壤	20
5.その他の遺構と包含層の遺物	26
III.おわりに	26

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2 中ノ原遺跡位置図(1/4,000)	4
Fig. 3 中ノ原遺跡第5次調査区位置図(1/1,000)	5
Fig. 4 中ノ原遺跡第5次調査区周辺現況図(1/500)	6
Fig. 5 遺構配置図(1/200)	8
Fig. 6 1号住居実測図(1/60)	9
Fig. 7 1号住居竈実測図(1/30)	9
Fig. 8 1号住居出土遺物実測図(1/4)	10
Fig. 9 2・3号住居実測図(1/60)	10
Fig.10 4号住居・5号土壤実測図(1/60)	11
Fig.11 4号住居竈実測図(1/30)	11
Fig.12 4号住居出土遺物実測図(1/4)	11
Fig.13 6号住居実測図(1/60)	12
Fig.14 6号住居竈実測図(1/30)	12
Fig.15 6号住居出土遺物実測図(1/4)	12
Fig.16 7・8号住居実測図(1/60)	13
Fig.17 9号住居実測図(1/60)	13
Fig.18 9号住居竈実測図(1/30)	14
Fig.19 9号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)	14
Fig.20 10号住居・11号土壤実測図(1/60)	15
Fig.21 10号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)	15
Fig.22 12・13号住居実測図(1/60)	16

Fig.23	12号住居竈実測図(1/30).....	17
Fig.24	12号住居出土遺物実測図(1/4)	17
Fig.25	13号住居竈実測図(1/30).....	17
Fig.26	13号住居出土遺物実測図(1/4)	17
Fig.27	113号住居実測図(1/60)	18
Fig.28	113号住居出土遺物実測図(1/4).....	18
Fig.29	109・124号掘立柱建物実測図(1/80)	19
Fig.30	14・100・111・114号土壙実測図(1/40)	21
Fig.31	11号土壤出土遺物実測図(1/4)	22
Fig.32	14号土壤出土遺物実測図(1/1・1/2・1/4)	22
Fig.33	15・85・110・112号土壤実測図(1/30)	24
Fig.34	100号土壤出土遺物実測図(1/4).....	25
Fig.35	111号土壤出土遺物実測図(1/4).....	25
Fig.36	ピット出土遺物実測図(1/1・1/2)	26

写真目次

- | | | |
|-------|---------------------|----------------------|
| PL. 1 | 1) 調査区全景（北東から）CG合成 | 2) 調査区東側全景（南東から）CG合成 |
| PL. 2 | 1) 調査区東側全景（北東から） | 2) 調査区西端部全景（北から） |
| PL. 3 | 1) 1号住居（西から） | 2) 1号住居竈（南西から） |
| PL. 4 | 1) 1号住居竈断面（南西から） | 2) 1号住居竈完掘状況（南から） |
| PL. 5 | 1) 2・3号住居（西から） | 2) 2号住居（西から） |
| PL. 6 | 1) 2号住居竈（南から） | 2) 3号住居（西から） |
| PL. 7 | 1) 4号住居・5号土壤（西から） | 2) 4号住居（西から） |
| PL. 8 | 1) 6号住居（北から） | 2) 6号住居竈完掘状況（南から） |
| PL. 9 | 1) 9号住居（南から） | 2) 9号住居竈完掘状況（東から） |
| PL.10 | 1) 10号住居・11号土壤（東から） | 2) 12・13号住居（西から） |
| PL.11 | 1) 12号住居竈（西から） | 2) 12号住居竈断面（西から） |
| PL.12 | 1) 13号住居（東から） | 2) 13号住居竈（南西から） |
| PL.13 | 1) 13号住居竈完掘状況（南から） | 2) 113号住居（西から） |
| PL.14 | 1) 109号掘立柱建物（西から） | 2) 14号土壤（北から） |
| PL.15 | 1) 85号土壤（西から） | 2) 111号土壤（西から） |
| PL.16 | 1) 114号土壤（北から） | 2) 15号土壤（北から） |
| PL.17 | 1) 110号土壤（南から） | 2) 112号土壤（東から） |
| PL.18 | 出土遺物1（縮尺不同） | |
| PL.19 | 出土遺物2（縮尺不同） | |
| PL.20 | 出土遺物3（縮尺不同） | |

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

中ノ原遺跡の立地する雑餉隈の低丘陵は、春日市や大野城市と境を接する福岡市の南東端にあり、のどかな田園風景が広がる農村地帯であった。この地に九州鉄道（現JR九州鹿児島線）の雑餉隈駅（現JR南福岡駅）や西日本鉄道の雑餉隈駅が開設されて丘陵上の市街化が始まる。この恵まれた交通の利便性によって周辺の田畠は次第に住宅地と化し、一層の市街化が進んだ。ところが、近年は社会環境の変化による市街地の再開発が急速に進み、次第に低中層の共同住宅へと建て替わりつつある。

雑餉隈丘陵の南の起点となる博多区西春町一帯は、中央部にいわゆる「筑紫通り」が開削されているが、その両側には旧状を留めた低丘陵が段丘状に残っている。その段丘状に立地する中ノ原遺跡は、はじめは未周知の遺跡で、その北端部が雑餉隈遺跡の一部として含まれていたに過ぎなかった。しかし、周辺域のデータ集積と精査の結果、平成16（2004）年に中ノ原遺跡として周知された。

平成22（2010）年10月6日、西春町4丁目1番地に切土造成事業が計画され、申請地内における埋蔵文化財有無の照会が埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された。申請地は、中ノ原遺跡の中央部に位置し、「筑紫通り」を挟んだ第4次調査区例から奈良時代の集落域が拡がっていることが予想された。そこで平成22（2010）年11月16日に確認調査を実施した結果、地表下30～55cmで遺存状況の良好な竪穴住居数棟を検出した。遺跡は、本来現状での保存が望ましいが、建設設計画では、丘陵面を道路面まで掘削して車両の進入を図るものであった。そこで福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課では、申請地全域を発掘調査して記録保存を図ることとした。切土造成の竣工期が決められて時間的に切迫していることから早急な発掘調査の着手が望まれた。発掘調査は、平成23（2011）年2月1日よりはじめ、4月16日に無事終了した。本調査は、事業の性格上民間受託事業と国庫補助事業を合せて実施した。この間、厳寒の中で緻密な発掘作業に従事した方々や物心にわたって協力いただいた施工事業者諸氏に感謝する次第である。

2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課（前埋蔵文化財第2課）

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課第1係長 常松幹雄

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 古賀とも子（前埋蔵文化財第1課管理係）

調査担当 埋蔵文化財調査課第1係 小林義彦（前埋蔵文化財第2課第1係）

技能員 谷 直子

調査・整理作業 の野文香（九州大学） 秋本君子 伊藤美伸 今村ひろ子 浦崎てい子

辛川容子 坂梨美紀 田中朋香 知花繁代 塚本よし子 土斐崎孝子 遠山勲

西田文子 梶山恵子 馬場イツ子 渋フミコ 日高芳子 増田ヒロ子 松下さゆり

松下由希子 森田祐子 諸泉良子 渡部律子 渡辺律子

発掘調査や資料整理にあたっては、山口譲治、横山邦維、常松幹雄氏に指導と助言を受けた。また、金属器は、上角智希氏（福岡市埋蔵文化財センター）に依頼して保存処理を施した。諸氏の協力に感謝申し上げるとともに本報告に生かせなかつたことを深くお詫びする次第である。



Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1~3)

中ノ原遺跡は、古くから雑餉と通称される雑餉隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端に位置する。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周辺域には青銅器製造工房跡の須玖氷田遺跡や須玖五反田遺跡などが展開している。雑餉隈丘陵は、春日丘陵から北東へ1kmほどの距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤層とし、諸岡川などの開析による谷が幾筋も嵌入していくつかの小さな低丘陵を形成している。この麦野～雑餉隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡と呼んでいる。

中ノ原遺跡のある雑餉隈の丘陵上でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃やナイフ形石器が麦野A遺跡1次調査区や麦野B遺跡3次調査区、雑餉隈遺跡の5・10次調査区、南八幡12次調査区で出土しており、散漫ながら丘陵上の広い範囲に拡がっていることが明らかになりつつある。次に、縄文時代の遺構は稀薄である。麦野B3次調査区や南八幡6次調査区、中ノ原5次調査区などで「落とし穴」と推察される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期は明確ではない。

弥生時代になると、一転して遺構は広範囲に拡がりを見せる。前期は雑餉隈丘陵南端の雑餉隈5次調査区で、円形住居と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落であった可能性が考えられる。中期は、麦野C遺跡で方形住居が検出されている。後期には、雑餉隈5次調査区や南八幡5・9次調査区で住居や掘立柱建物群が検出されている。雑餉隈丘陵では、南縁の三つの丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたものと思われる。一方で、墳墓域は麦野C5次調査区や南八幡17次調査区で甕棺墓が単発的に検出されたのみで集落域に伴う墳墓域は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡2・3次調査区で竪穴住居が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落跡との関連については明らかではない。

奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7世紀末から8世紀初めには、雑餉隈9次調査区で方形に配置された大型の建物群が出現する。その規模と配置は、官衙的な性格を想起させる。更に、8世紀前半から後半になると丘陵の全域にわたって集落域が展開する。雑餉隈遺跡5次調査区で50棟を超す住居が、また近接する麦野C1・5・13次調査区では100棟にのぼる住居群が検出されている。住居は、数回にわたって建替えられており、長期的に集落が展開していたと推測され、丘陵毎に多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点的な集落の様相が想起される。あたかも「雑餉隈」の名が、大宰府官人の雑餉の居住地や食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するようである。なお、平安時代の初めには集落群は急速に縮小する。麦野A3次調査区で井戸跡が検出され、中世になると集落の中心域が雑餉隈丘陵から麦野丘陵へと移行する様子が窺がえる。

雑餉隈丘陵の東南部に位置する中ノ原遺跡は、雑餉隈遺跡と開斬谷を隔てた東にある南北が750m、東西が250mの南北に長い丘陵上に立地している。この中ノ原遺跡は、近年まで未周知の遺跡で、その北端の一部が雑餉隈遺跡の中に含まれていた。そのため発掘調査例が少なく未知的な点が多いが、調査事例からすると、その初源は縄文時代に始まる。遺跡南端の第3次調査区で落し穴が検出されている。次に第1次調査区では、弥生時代の井戸や土壙などが検出されているが、縄文～古墳時代を通して遺構的には稀薄である。これが奈良時代になると竪穴住居群が第2次調査区を除く4地点で検出されており、麦野C遺跡や南八幡遺跡と同一的様相を呈する。

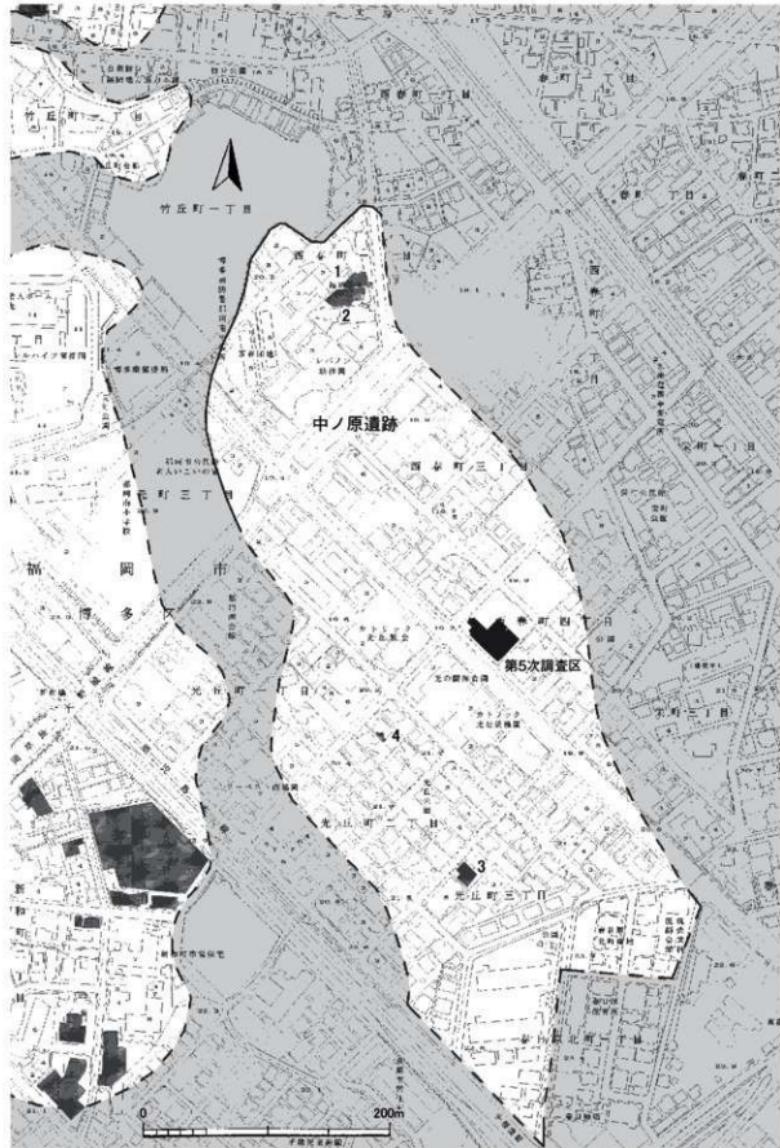


Fig. 2 中ノ原遺跡位置図(1/4,000)

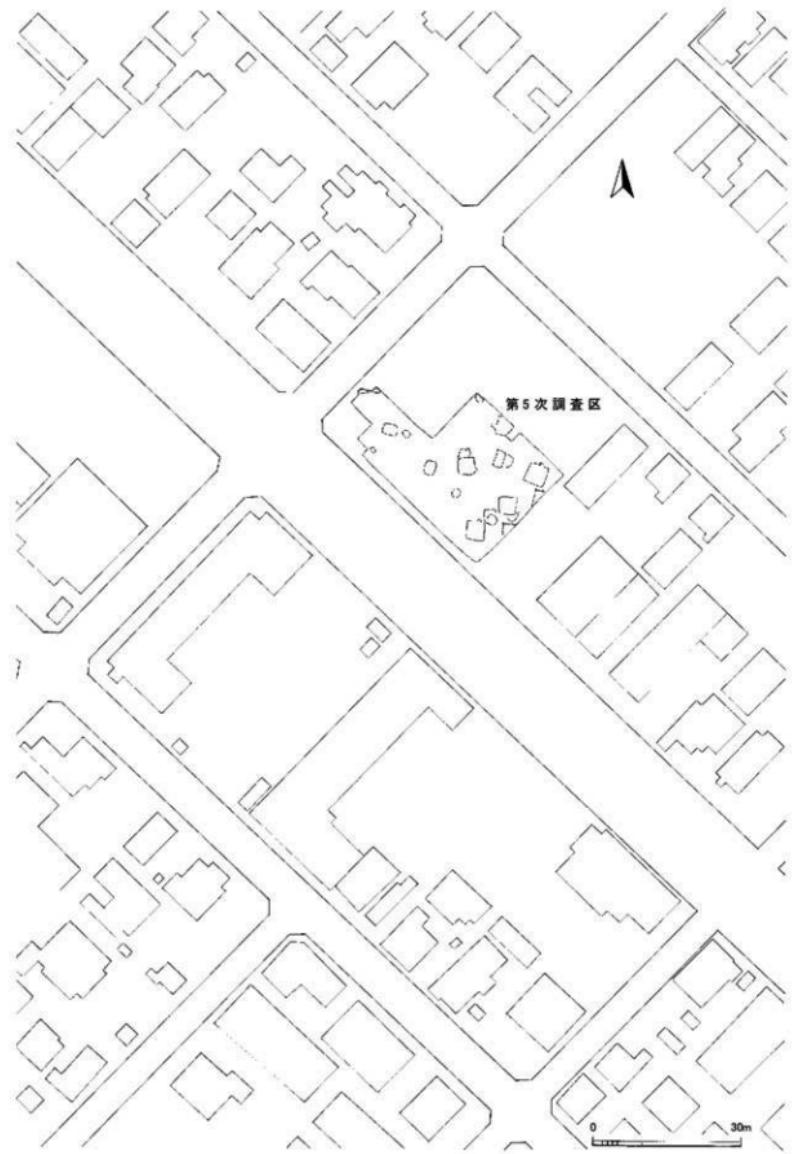


Fig. 3 中ノ原遺跡第5次調査区位置図(1/1,000)

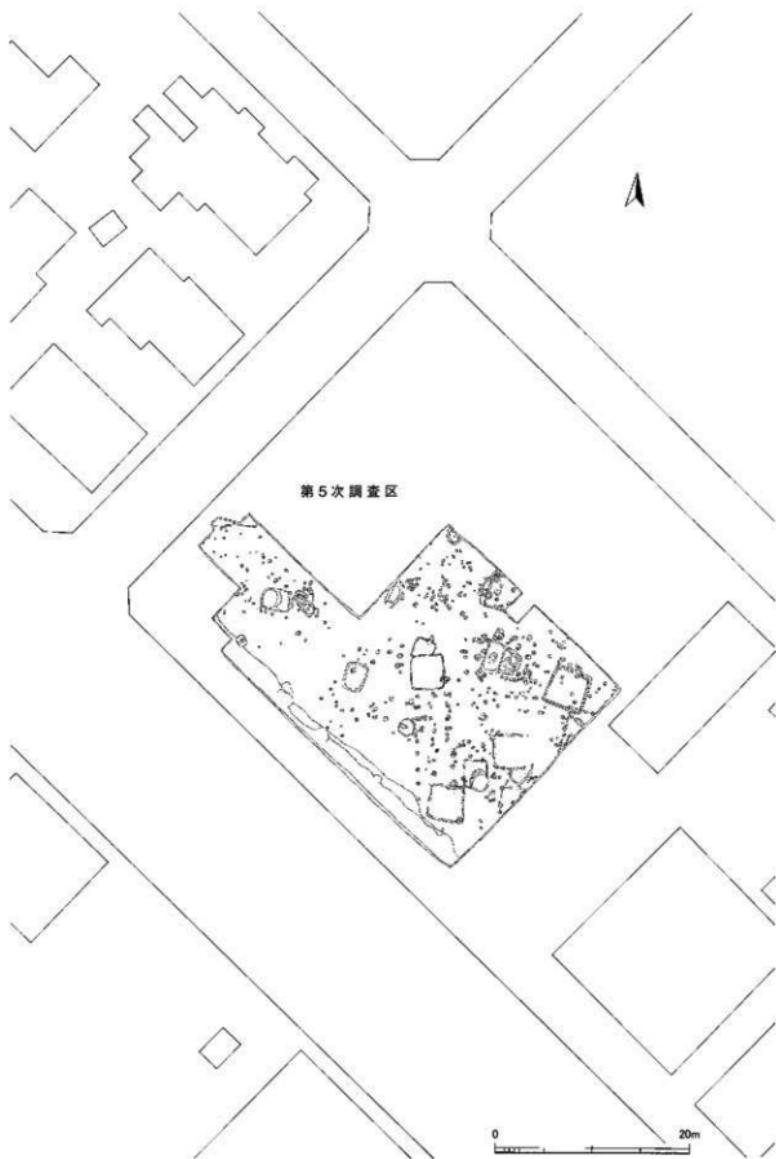


Fig. 4 中ノ原遺跡第5次調査区周辺現況図(1/500)

II. 調査の記録

1 調査の概要

中ノ原遺跡は、御笠川の西岸に南北にのびる雑餉隈の丘陵上にある。この雑餉隈丘陵は、彌入する開析谷によって六つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には南から中ノ原遺跡、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、麦野C遺跡・B遺跡・A遺跡の遺跡群が縦列的に占地している。中ノ原遺跡は、この雑餉隈丘陵の南東部に位置する南北長が750m、東西長が250mの丘陵上に拡がる遺跡で、西縁から北縁は雑餉隈遺跡と開析谷を隔て対峙し、東には沖積地が広がっている。第5次調査区は、中ノ原遺跡中央部のやや東寄りに位置し、丘陵が沖積地にむかって緩やかに傾斜を始める東斜面上に立地している。中ノ原遺跡では、これまでに4地点で発掘調査が実施され、丘陵上には8世紀代の集落域が比較的広範囲に拡がっていることが確認されている。

発掘調査は、平成23（2011）年2月1日にパワーショベルによる表土層の除去作業を南側から開始した。表土層を30～50cm除去すると基盤層の鳥栖ローム層を検出した。丘陵は、南東にむかって緩やかに傾斜しており、その緩斜面上で竪穴住居や土壙を検出した。分布的には、住居群は南東に寄つて拡がる傾向が窺える。また、西縁は昭和40年代初めに開通した博多駅春日原線（通称筑紫通り）に因つて開削されている。発掘調査は、排土処理の都合上調査区を南北に二分割して行い、全景写真は（株）測技に委託してデジタルモザイク写真を合成した。また、調査区は2m×2mのグリッドを任意に設定し、東から西へはa～oのアルファベット、南から北へは1～22のアラビア数字を組み合わせて表記し、長軸線は磁北より6°20'西偏している。

2 竪穴住居（SC）

竪穴住居跡は、12棟を検出した。この住居群の中には、重複や軒を接するものがあり、数期にわたって建て替えが繰り返されていたと考えられる。分布的には、調査区の南東部にまとまって展開しているが、北西端にも1棟の住居が位置しており、この間には20～30mの隔たりがあり広場的空間が存在した可能性も想起される。規模的には、一辺が4m余（SC-02・06・09）のものと2m余（SC-04・13）のものがある。また、付設された竈の原形を留めた状態で検出された。

1号住居 SC-01 (Fig. 6~8 PL. 3・4・18)

1号住居は、調査区の南東端に位置し、南隅壁は12号掘立柱建物と重複している。平面形は、南北長が415cm、東西長が420cmの方形プランをなす。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は、東壁側が35cm、西壁側が45cmで北壁の中央部よりやや東に寄つて竈を付設している。竈は、壁面に密着して灰白色粘土を幅25～40cmの厚さで楕円形に廻して竈袖をしている。竈袖は、床面から35cmの高さまで積上げ、壁面より25cm手前の上縁に35cm径の円孔を穿つて竈の受口としている。竈袖の断面形はドーム形をなし、内壁は朱色に厚く赤変していた。火床は、この受口の直下に拡がつておらず、赤変した焼土床上に焼土粒と炭片が堆積していた。また、火床の手前には54×64cm、深さ15cmの

次数	調査番号	所在地	調査期間	調査面積 (m ²)	報告書	時代	概要	遺物	備考
1	9324	西春町1丁目1-27	1993.07.19～ 1993.08.06	345.0	409	弥生・奈良時代	昇戸・竪穴式住居・ 土壙・柱穴	竈口縁塗・土器2個・ 須恵器・軽用器・鉄器・瓦	旧瀬附御遺跡2次
2	9349	西春町1丁目18	1993.11.18～ 1993.01.20	156.0	409	奈良時代	竪穴住居4・柱穴	須恵器・土師器・鉄器	旧瀬附御遺跡3
3	0402	光丘3丁目3-21	2004.04.02～ 2004.04.19	115.2	年報VOL.19	绳文～古墳時代	落とし穴・ピット	土師器・須恵器・須恵石	旧1次
4	0756	光丘2丁目16	2007.11.27～ 2007.12.07	15.8	年報VOL.22	奈良時代	竪穴式住居1・柱穴 2	須恵器蓋・环・高麗	旧2次
5	1038	西春町1丁目1	2011.02.01～ 2011.04.16	793	本報告書	奈良時代	竪穴式住居・掘立柱 建物・土壙	土師器・須恵器・須恵石・ 鉄器	

Tab. 1 中ノ原遺跡発掘調査一覧

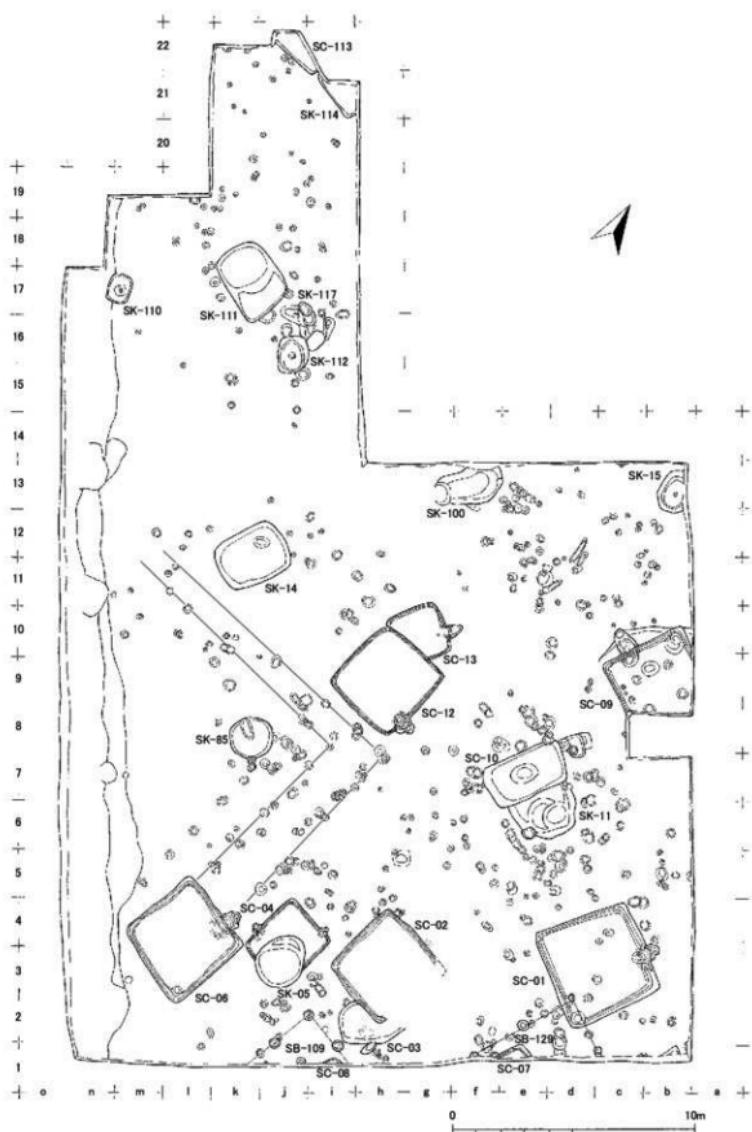


Fig. 5 遺構配置図(1/200)

楕円形のピットが掘り込まれており、灰の掻き出しに供したと思われる。煙道は、壁下から55°の傾斜で35cmほど壁外へ延ばしている。この竈袖下から幅が15~20cm、深さが6~9cmの周溝が対面する袖下まで壁下を全周している。床面は平坦で、黄褐色粘土を8~15cmの厚さで敷き固めて貼床している。南北の隅角線上に4個のピットがありでいるが、主柱穴は確定できなかった。床面積は17.43m²。覆土は黒色土の單一層で、須恵器壺・高壺・坪・壺蓋のほか土師器甕が出土した。

1は、口径が13.3cm、底径が8.6cm、器高が3.5cmの須恵器壺である。体部はストレートに外反する。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面は回転ナデ。胎土は良質で、少量の微細~小砂粒を含む。色調は淡灰色。2は、須恵器高壺の脚である。脚裾径は9.3cm、細長くラッパ状に開く脚部は、裾部を水平に整え、端部は下方に小さく摘み出している。調整は、内外面ともにヨコナデ。胎土は良質で、焼成は堅緻。色調は灰色。3は、口径が32.5cmの土師器甕である。「く」字状の口縁部はストレートに外反し、胴部は卵形をなそう。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は押圧後に粗いヘラケズリ。内外面とも2次被熱による赤変がある。胎土は粗く、細~石英中砂粒と雲母粒を多く含み、色調は明黄色。

2号住居 SC-02 (Fig. 9・PL. 5・6)

2号住居は、調査区の南辺にある2~6号住居群中で最も東に位置し、3号住居の北壁を切っている。東壁が搅乱を受けているが、平面

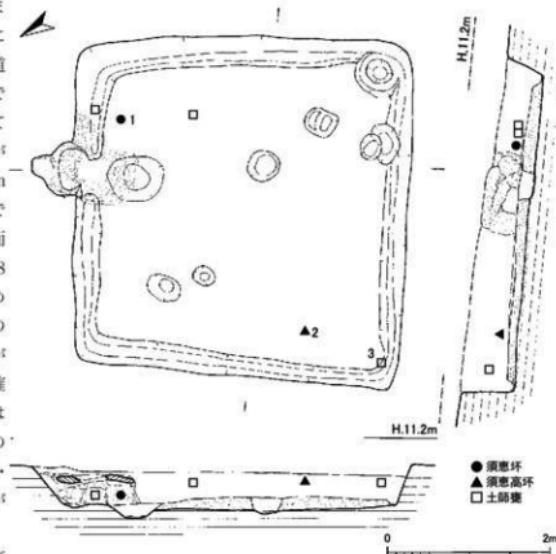


Fig. 6 1号住居実測図(1/60)

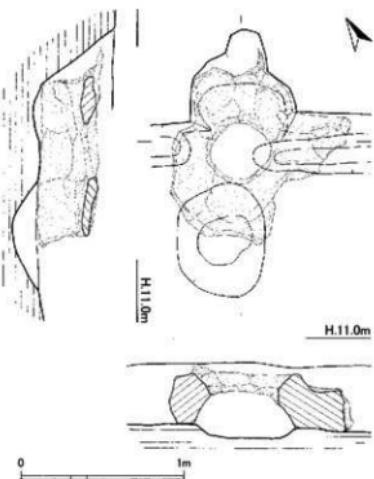


Fig. 7 1号住居竈実測図(1/30)

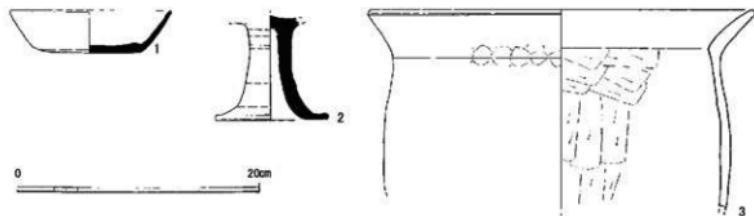


Fig. 8 1号住居出土遺物実測図(1/4)

形は、南北長が365cm、東西長が340cmの方形プランをなす。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は30~39cm。壁下には幅が15~20cm、深さが5~8cmの浅い周溝が全周している。床面は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み壁下との比高差は3~8cmあり、黄褐色粘土ブロックを5~10cmほど硬く敷き詰めて貼床としている。主柱穴は不明。北壁中央部の壁上に赤変した浅いピット状の窪みがあり、竈の煙道跡かと考えられるが、床面や壁面に被熱痕はなく竈の存否は不詳。床面積は12.41m²。覆土は黒色土の單一層で、須恵器甕・环・环蓋片のほかに土師器甕・高环・环蓋のほかに移動竈片や手握土器片が出土した。

3号住居 SC-03 (Fig. 9 PL. 5・6)

3号住居は、調査区の南端に位置する小型の住居で、北壁は2号住居に削平されている。平面形は、長辺が約280cm、短辺が170cmのやや不整な隅丸長方形プランをなす。壁面はやや緩やかに立ち上

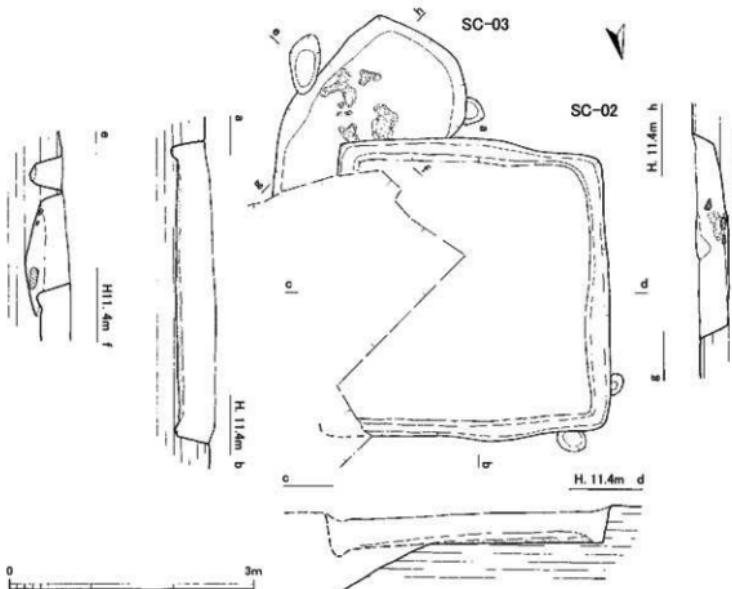


Fig. 9 2・3号住居実測図(1/60)

がり、壁高は40~53cm。床面は浅い凹レンズ状をなし、黄褐色粘土ブロックを貼床状に2~4cmの厚さに敷き固めている。床面の南壁に沿って灰白色粘土ブロックが焼土粒や炭粒に混じって拵がっていた。加えて南壁の中央部には被熱による赤変があり、竈の破壊痕が想起されることから住居跡と考えた。覆土は黄褐色粘土粒の混入した黒色土で、土師器甕片がわずかに出土した。

4号住居 SC-04 (Fig. 10~12 PL. 7・18)

4号住居は、調査区の南辺に連なる2~6号住居群中の真ん中にある小型の住居で、東には2号住居が、西には6号住居が隣接して位置している。南壁は、5号土壤に因って大半が削平されている。平面形は、南北長が293cm、東西長248cmの方形プランをなす。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は35cmで、西壁の南隅壁に寄って竈を付設している。竈は、床面上に直径が35cm、深さが15~20cmのピットを掘り

込み、そのピットを中心にして灰白色粘土を幅30cmの厚さでU字状に廻して竈袖としている。火床はピットの前面にあり、ピットは火力を増す効果を考えられ、壁中位から壁外へ張出した煙道の周囲は被熱による赤変が観られる。袖は破壊されず、ピット上には23cm×40cmの楕円形プランをした甕等の受け部孔が遺存していた。この竈袖から幅が10cm、深さが3~7cmの周溝が壁面を全周している。床面は、浅く凹レンズ状に窪んだ掘り方に5~8cmの厚さで黄褐色粘土を敷き固めて貼床としている。

床面積は7.27m²。覆土は黒色土の互層で、遺物は土師器の甕や瓶・塊・壺・壺蓋・移動式竈片と須恵器の甕・壺・壺蓋が出土した。

4は、須恵器皿で、口径は16.4cm、底径は14cm、器高は2.8cm。体部は短く外反し、底部は浅い凹レンズ状をなしている。体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はケズリ後にナデ調整。胎土は良質で、微細～細砂粒と雲母微細を含む。淡灰色。5は、口径が15.6cm、高台径が10.4cm、器高が5.3cmの須恵器壺である。体部はストレートに外反し、高台は端部を小さく摘み出す。体部はヨコナデ、底部はナデ調整。胎土は良質で、微細～細砂粒を比較的多く含み、焼成

は良好。内面は灰色、外面は濃灰色。

6号住居 SC-06

(Fig. 13~15 PL. 8・18)

6号住居は、調査区の南辺に連なる3棟の住居群中でもっとも西端に位置し、

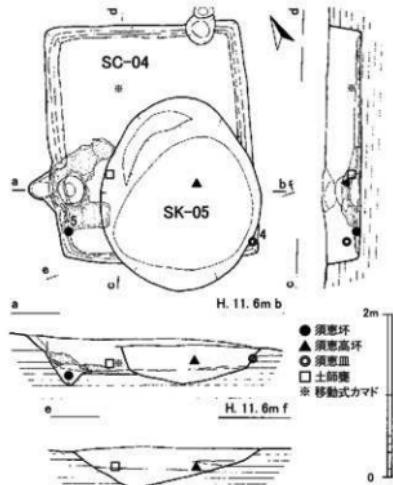


Fig. 10 4号住居・5号土壤実測図(1/60)

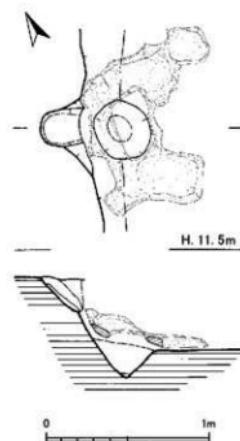


Fig. 11 4号住居竈実測図(1/30)

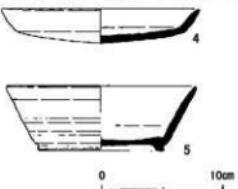


Fig. 12 4号住居出土遺物実測図(1/4)

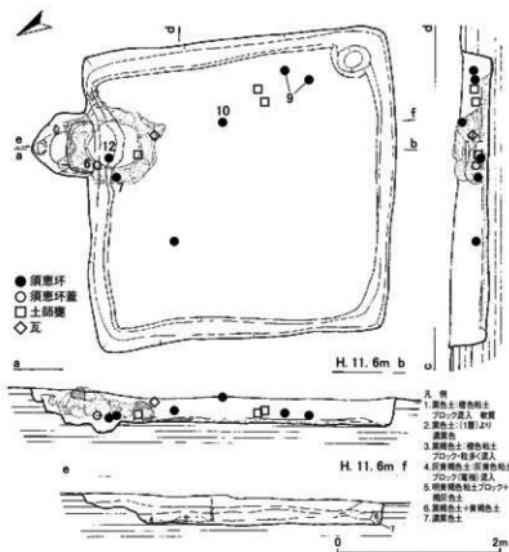


Fig. 13 6号住居実測図(1/60)

壁下には10~20cm、深さが6~9cmの周溝が全周している。北壁の東隅壁寄りに竈が付設されている。竈は、はじめに壁下から35cm壁外に張り出して掘り込む。そこから10~15cmの高さまで壁を作つて、さらに20cmほど2段目を壁外に掘り下げ、12cmほど立ち上げてその上部にピットを付設した3段掘りの煙道を付けている。竈は、煙道の1段目の壁上面から灰白色粘土を幅が20~25cmの厚さで110cm×90cmの楕円形に廻して袖を作り、その真ん中に55~60cm径の円形プランの受口を作っている。竈袖の高さは煙道部が45cm、焚口側が22cmで内高は13cmと低い。火床は、煙道1段目の床面上にあり、浅く凹レンズ状の窪みには焼土塊が厚く堆積し、両袖内壁も赤変していた。床面は平坦で、黄褐色粘土を3~5cmの厚さで敷き固めて貼床としている。床面積は14.25m²。主柱穴は確認で

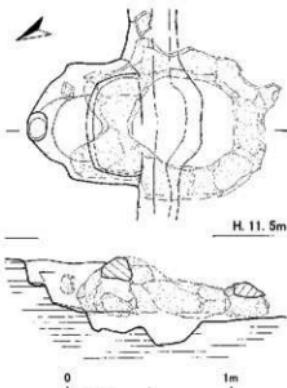


Fig. 14 6号住居実測図(1/30)

すぐ北東には4号住居が、東へ4mの距離には109号建物がある。平面形は、南北長が380cm、東西長が370cmの方形プランを呈する。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は南西隅壁が21cm、北西隅壁が39cmで

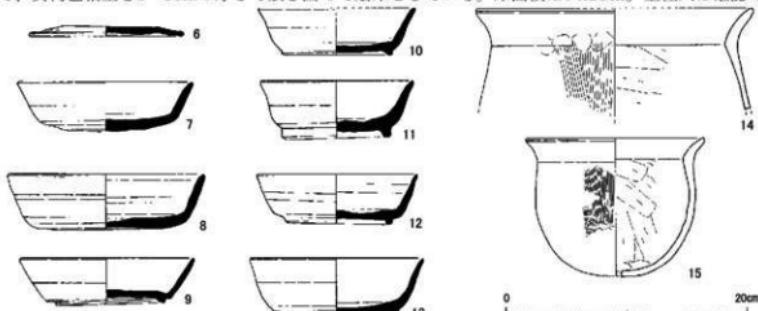


Fig. 15 6号住居出土遺物実測図(1/4)

きなかった。覆土は黒色土で、下層には黄褐色粘土粒や灰白色粘土の混入層が堆積していた。遺物は、須恵器壺や壺蓋と土師器甕のほかに土師質の平瓦片1点が出土した。

6は、口径が12.8cm、器高が0.9cmの須恵器壺蓋である。天井部から体部、口縁部まで水平に延び、口縁部は肥厚ぎみに仕上げている。天井部はケズリ状のナデ、体部はヨコナデ調整。胎土は良質で、微細～粗砂粒と雲母微細をわずかに含み、焼成は堅緻。灰色。7・8は、須恵器壺で、体部はストレートに外反し、口縁部はやや尖りぎみに仕上げている。調整は、体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラケズリ。7は、口径が14.5cm、底径が10cm、器高は4.1cmで、底部は小さく凸レンズ状をなす。胎土は良質で、微細～細砂粒を含む。焼成は軟質で、色調は灰白色。8は、口径が16.2cm、底径が10.2cm、器高は4.6cmで、体部中位に四線状の浅い瘤みが巡っている。胎土は精緻で、微細砂粒をわずかに含む。軟質。9～13は高台の付いた須恵器壺である。体部がストレートに外反するもの（9・12）と口縁部が小さく開いて外反するもの（10・11・13）がある。また高台の疊付が外上方にむかって跳ね上がるもの（10～13）と底部にむかって内傾するもの（9）がある。体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラ切り。胎土は良質で、微細～細～小砂粒を含み、色調は淡灰～灰・灰白色。焼成は、10・13が軟質で、9・11・12は堅緻。14は、口径が23cmの土師器甕。口縁部は「く」字状に外反し、胸部は倒卵形をなす。調整は外面が粗いタテハケ目、内面は押圧後にヘラケズリ。胎土は粗く、細～石英小砂粒と雲母微細を含む。15は、口径が14.8cm、器高が11.3cmの土師器鉢。口縁部は、短く「く」字状に外反し、胸部は球形をなす。調整は、外面がやや細かいハケ目、内底面は指頭押圧ナデ、内面はタテ～ナナメのヘラケズリ。胎土は良質で、微細～石英小砂粒を含む。

7号住居 SC-07 (Fig. 16)

7号住居は、調査区の南東端にある住居で、北には109号掘立柱建物と2号住居が位置する。住居は、北西隔壁を検出したのみで大半は調査区外に抜がっており、その全容は明らかでない。壁面は急峻

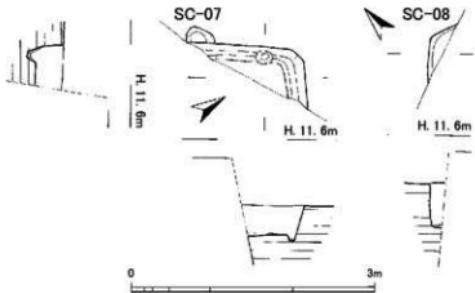


Fig. 16 7・8号住居実測図(1/60)

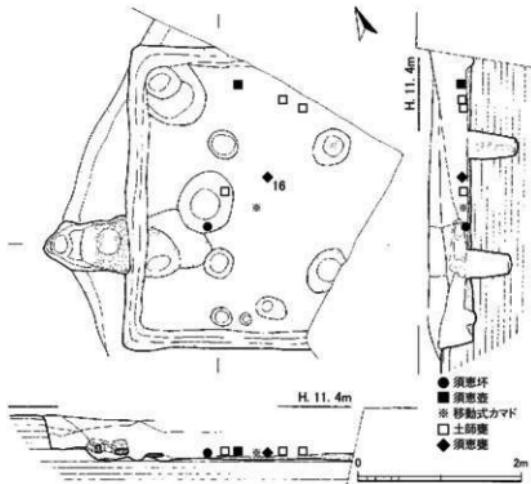


Fig. 17 9号住居実測図(1/60)

に立ち上がり、壁高は35cm。壁下には幅が12~15cm、深さが7~9cmの周溝が巡る。覆土は黒色土の單一層で、土師器甕片が出土した。

8号住居 SC-08 (Fig. 16)

8号住居は、調査区の南端にある竪穴住居で、12号掘立柱建物と重複して位置し、すぐ北には2・3号住居が占地している。住居は、北西隅壁を残して大半は調査区外に拡がっており、全容は明らかではない。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は56cmと深い。覆土は黒色土の單一層で、遺物は出土していない。

9号住居 SC-09 (Fig. 17~19 PL. 9・20)

9号住居は、調査区の東端に位置し、南へ3mの距離には10号住居が、7m南東には12・13号住居がある。北壁と東壁が調査区外に拡がっているが、平面形は東西長が370cm、南北長が420cmほどの方形プランをなそう。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は30~35cmで壁下には幅が15cm、深さが7~9cmの周溝が全周している。西壁の南隅壁より竪穴が付設されている。竪穴は、壁下から60cmほど壁外に張出して火床を作り、火床を中心にして灰白色粘土を幅15~20cm、厚さが15cmの灰白色粘土を壁面から内外へ50cm楕円形に張り巡らして竪穴としている。この火床の真上には20cm×40cmの楕円形をした甕の受口を穿っている。周溝の手前には、10cm余の浅いピットを掘って焚口としている。煙道は、火床から15cmほど緩傾斜してフラット面を作り、そこから15~20cm径のピットを40cm斜行させて煙出しとしている。床面は平坦で、黄褐色粘土ブロックを3~5cmの厚さで敷き固めて貼床としている。床面積は約14.3m²。壁下から100cmの距離に直径が40~50cm、深さが56~67cmの柱穴が4本あり、12~15cm径の柱痕跡が検出された。柱間が140~155cmの4本柱である。覆土は黒色土と暗黒茶褐色土の互層で、須恵器甕・壺・壺蓋・皿・土師器甕と移動竪片・鉄鎌・刀子が出土した。

16は、口径が27.8cmの須恵器甕。短く「く」字状に外反する口縁部は、外唇を小さく下方に摘み出す。

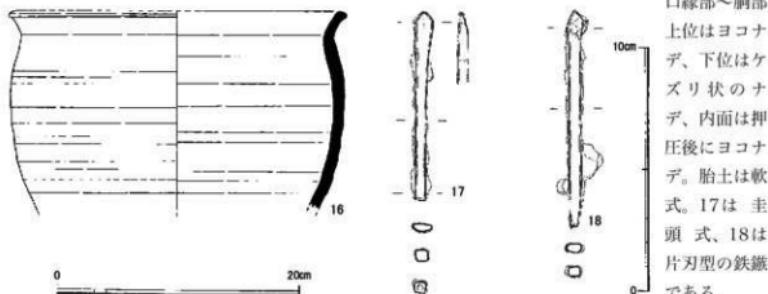


Fig. 18 9号住居竪穴測図(1/30)

0 20cm

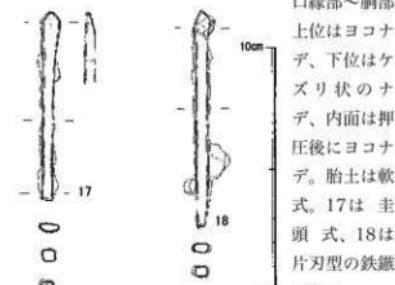


Fig. 19 9号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)

口縁部～胴部
上位はヨコナ
デ、下位はケ
ズリ状のナ
デ、内面は押
圧後にヨコナ
デ。胎土は軟
式。17は、圭
頭式、18は
片刃型の鐵
鎌である。

10号住居 SC-10 (Fig.
20・21 PL.10・18・20)

10号住居は、調査区の南東部に位置し、西4mの距離には12・13号住居が、南へ6m距離には2号住居がある。平面形は、南北長が340cm、東西長が190～210cmの長方形プランを呈し、東壁は11号土壌の西壁を切っている。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は40～53cmで壁下を巡る周溝は検出されていない。床面は、壁下から中央にむかつて浅い凹レンズ状をなし、墻央には80～118cm、深さが14cmの梢円形プランの小土壙がある。床面には黄褐色粘土を薄く敷き固めて貼床状をなしている。竈は遺存していないが、床面上や覆土中には灰白色粘土粒がブロック状に

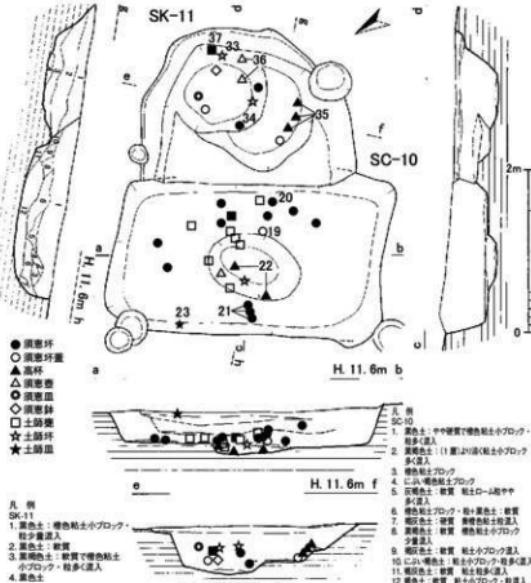


Fig. 20 10号住居・11号土壌実測図(1/60)

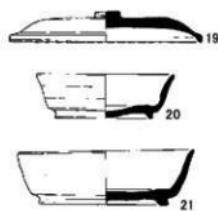


Fig. 21 10号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)

混入していた。規模的には、3号住居や14・112号土壙と大差ないが、電袖の構築材である灰白色粘土が検出されたことから3号住居と同一遺構と判断した。床面積は7.65m²。覆土は黒色土～黒茶褐色土で、須恵器壺・高壺・壺・壺蓋・皿と土師器甌・鉢・櫃・壺のほかに砥石が出土した。

19は、口径が15.8cm、器高が2.4cmの須恵器壺蓋である。体部は小さく内彎し、口縁部は垂直に摘み下している。天井部にはボタン状の扁平な摘みが付く。体部はヨコナデ、内天井はナデ、外天井部は右廻りのヘラケズリ。胎土は良質で、微細～細砂粒を含み、焼成は軟質。内面は淡灰黄色、外面は淡灰白色。20・21は、高台付きの須恵器壺。20は口径が11.4cm、高台径が8cm、器高は3.7cm。体部は垂直に立ち上った後に小さく屈曲して外反する。底部は底央が凹レンズ状に内彎し、高台の疊付は端部を小さく摘み上げている。21は口径が14.6cm、高台径が10.7cm、器高は4.6cm。体部はストレートに外反し、水平に整えた高台の疊付は端部を小さく摘み上げている。いずれも調整は、体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。胎土は精良で、若干量の微細～細砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は灰色で、21の外面は暗灰色。22は、壺部が大きく歪んだ須恵器高壺で、口径が20.1cm、脚裾径が9.5cm、器高は5.5～7.4cm。壺体部は浅く、口縁部は短く垂直に立ち上がり、端部は小さく内傾している。短い脚部は大きくラッパ状に外反し、裾端部は下方に小さく摘み出す。調整は、壺体部がヨコナデ、内底部はナデ、外底面はヘラケズリで、脚部はヨコナデ。胎土は良質で、微細～石英小砂粒を含む。焼成は軟質で、色調は淡灰白色。23は、口径が18.6cm、底径が10cm、器高が2.3cmの土師器皿である。体部は小さく内彎気味に立ち上り、体部と底部との境には小さな段を作り。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はナデ。

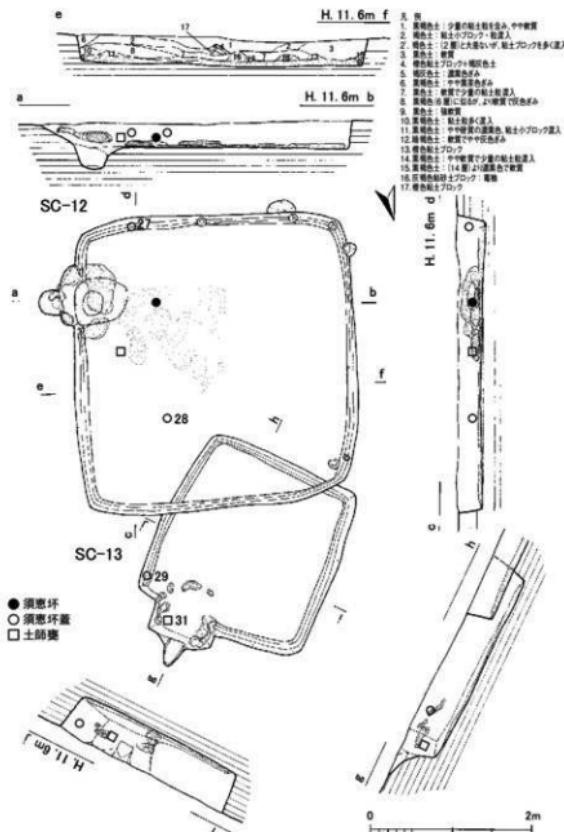


Fig. 22 12・13号住居実測図(1/60)

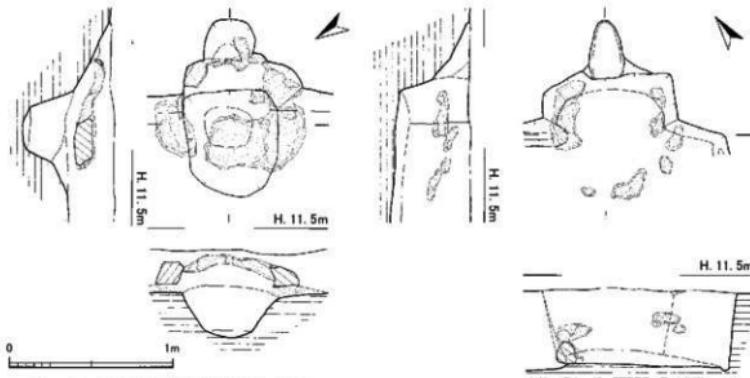


Fig. 23 12号住居竈実測図(1/30)

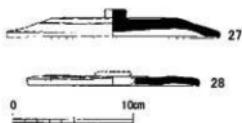


Fig. 24 12号住居出土遺物実測図(1/4)

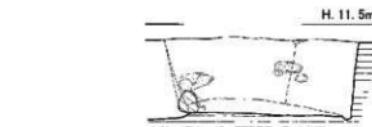


Fig. 25 13号住居竈実測図(1/30)

底面はヘラケズリで全体的に調整は粗い。胎土は良質で、多量の微細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む。色調はくすんだ淡黄褐色。24は、把手付の須恵器壺である。胴部は、玉葱状の偏球形をなし、その最大径部に上向きの短い把手を付けている。調整は内外面ともに押圧後にヨコナデ。胎土は良質で、微細～小砂粒を多く含み、焼成は堅緻。内面は灰色、外面は淡灰色。25・26は砂岩質の砥石片である。砥面は、表裏2面と両側面の4面である。

12号住居 SC-12 (Fig. 22~24 PL. 10・11・19)

12号住居は、調査区のはば中央にあり、北壁は13号住居の南壁を削平している。平面形は、南北長が365cm、東西長が346cmの方形プランをなす。東壁の南隅壁に寄って遺存状況の良い竈が付設されている。竈は、壁面から20cmほど斜抗状に張出し、その先端に直径が25cmの煙道を接続している。壁下には壁面に接して55cm×65cm径で深さが26cmの梢円形プランの小土壙を掘り込み、床面側には緩やかなスロープを設けている。燃焼材の投入や灰の掻き出しに利するためと推考される。電袖は、灰白色粘土をこの小土壙から壁外の張出し部を取り囲むよう巡らし、その真上には竈の受口が穿たれている。袖の幅は20～30cm、厚さは8～15cmで、内壁は良く焼けている。また、袖と床面の間には厚さが5cmの黒色土が敷かれ

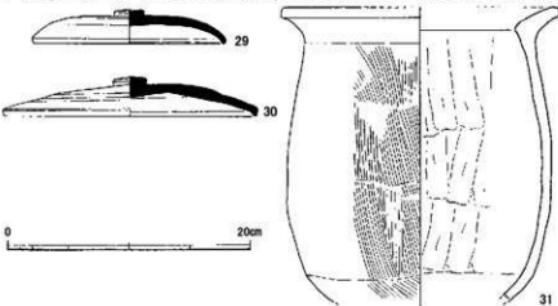


Fig. 26 13号住居出土遺物実測図(1/4)

ている。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高は、25~30cm。壁下には竈の両袖から発した幅が8~10cm、深さが5~8cmの周溝が巡っている。南壁と西壁下の周溝上には、直径が10cm、深さが15~20cmの細いピットが掘り込まれていた。壁面の保護材を固定したものか。床面は平坦で、黄褐色粘土を5cmほど厚さに敷き固めて貼床としている。主柱穴は未検出。床面積は、12.6m²。覆土は黒色土で、下層には黄褐色粘土粒や灰白色粘土粒が混入していた。遺物は、須恵器壺・壺・壺蓋や土師器甕・鉢・瓶・壺・壺蓋のほかに移動式竈片が出土した。

27・28は、須恵器壺蓋である。27は、口径が17.5cm、器高は2.4cm。体部は、水平な天井部から緩やかに外反し、口縁部は内面に大きく屈曲して水面を作った後に端部を下方に摘み出している。天井部には1.8cm径のボタン状の摘みが付く。胎土は良質で、微細～小砂粒を比較的多く含む。焼成は軟質で、淡灰色。28は、口径が14.2cmで、天井部から体部は水平に延び、口縁部は短く下方に摘み出している。胎土は精良で、細～小砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。色調は灰色。いずれも調整は、体部がヨコナデ、内天井部がナデ、天井部はヘラケズリ。38は口径が14cm、器高が1.2cmの須恵器壺蓋。ヘラケズリの天井部にはボタン状の摘みが付く。

13号住居 SC-13 (Fig. 22・25・26 PL. 12・13・19)

13号住居は、調査区の中央部に位置し、南壁～東壁南半は12号住居によって削平されている。平面形は、南北長が210~230cm、東西長が195~220cmのやや不整な方形プランをなしている。北壁の東隅壁に寄って竈が付設されている。竈は、壁外へ30cmほど張出して掘り込み、底から約35°の斜抗を掘って煙道を付けている。この張出しから灰白色粘土を70cm径の円形に巡らして竈袖としているが、一部を除いて破壊が著しい。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高は40~47cmで壁下には竈の両袖から発した幅8~10cm、深さが2~5cmの周溝が巡っている。床面は、平坦で黄褐色粘土を薄く敷き固めて貼床としている。床面積は、4.6m²で主柱穴は、検出できなかった。覆土は、黒色土の單一層で、須恵器壺・壺蓋と土師器甕・壺・壺蓋が出土した。

29・30は、体部は内湾する生焼けの須恵器壺蓋。口縁部は、内傾気味に下方へ摘み出し、天井部には扁平なボタン状の摘みが付いている。体部がヨコナデ、内天井部はナデ、天井部は左廻りのヘラケズリ。29は、口径が16cm、器高は2.8cm。30は、口径が23.2cm、器高は3.2cm。胎土は良質で、微細～細・小砂粒を多く含み、淡明橙色～灰白色。30は、器形の歪みが著しい。31は、口径が23cmの土師器甕である。肥厚した口縁部は、短く「く」字状に外反し、胴部は下膨れした卵形を呈する。口縁部がヨコナデ、胴部内面は下から上への粗いヘラケズリ、外面は粗いタテハケ目で、炭化物様の黒色物が付着している。胎土は粗く、細～中砂粒を多く含むほかに少量の雲母粒と赤褐色粒を含む。

113号住居 SC-113 (Fig. 27・28 PL. 13・19)

113号住居は、調査区の最北端にあり、すぐ東には114号土塙が位置しているが重複するか否かは明らかでない。住居は、南東隅壁と南壁の一部を検出したのみで全容は明らかでないが、平面形

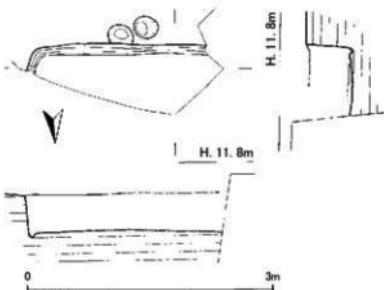


Fig. 27 113号住居実測図(1/60)

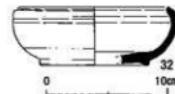


Fig. 28 113号住居
出土遺物実測図
(1/4)

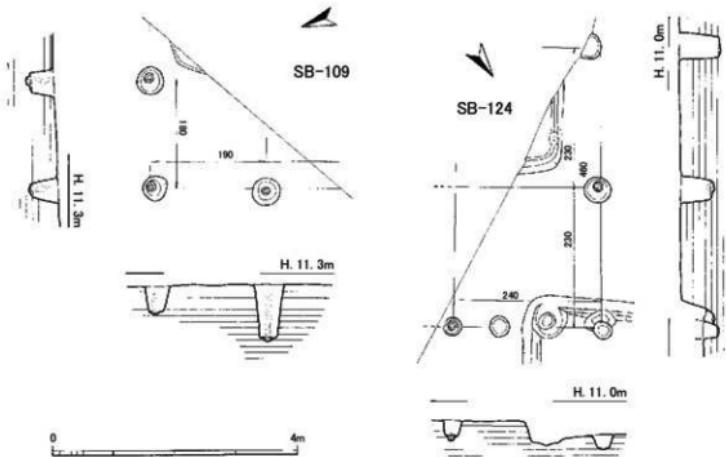


Fig. 29 109・124号掘立柱建物実測図(1/80)

は、一辺が3mほどの方形プランをなそうか。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は50cm。壁下には幅が10cm、深さが2~4cmの浅い周溝が巡っている。床面は平坦で、西へむかってやや傾斜している。覆土は黄褐色粘土粒を含んだ黒色土の單一層で、土師器甕や須恵器の小片がわずかに出土した。

32は、口径が12.4cm、高台径が9cm、器高が4.8cmの須恵器環である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は上方に小さく摘み上げている。口縁部下には、断面形が台形をした凸帯状の段が巡る。高台はやや外側に張り出す。調整は、体部がヨコナデ、内底面がナデ、体部下位から外底面はヘラケズリ。胎土は精良で、微細～細砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。灰色。

3 掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物は、2棟を検出した。この2棟のほかにも柱痕跡を残す柱穴があり、更に幾棟かの建物があったものと思われる。また、6号住居と12号住居の間にはL字状に巡る矩形の柱穴列があり、柵列状の遺構があった可能性が想起される。

109号掘立柱建物 SB-109 (Fig. 29 PL. 14)

109号掘立柱建物は、調査区の南縁に位置する建物で、すぐ北には3号住居がある。建物は北西隅柱とその東柱および南柱を残して調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、西側柱間は190cm、北側柱間は180cmの1間×1間であるが、桁行および梁行共に延びる可能性がある。柱穴は、直径が40~45cm、深さが41~45cmでいずれの柱穴も10~15cm径の柱痕跡が残っていた。礎底は柱の加圧で2~6cmほど沈み込んでいる。覆土は黒色土で、土師器甕片と黒曜石片が出土した。

124号掘立柱建物 SB-124 (Fig. 29)

124号掘立柱建物は、調査区の南東端に位置する東西棟の建物で、1号住居と重複している。桁行全長は460cm、柱間は230cm、梁行全長が240cmの2間×1間の建物であるが、梁行はさらに東へ延びる可能性がある。柱穴は、30~43cm、深さが35~59cmの円形プランを呈し、柱穴からは15cm径の柱痕跡が検出された。覆土は黄褐色粘土粒をわずかに含む黒色土で、土師器甕片がわずかに出土した。

4 土 壤 (SK)

土壤は、11基検出した。プラン的には方形と円形のほか不整円形で、その機能は明らかではない。このうち小型の方形土壤には壙底に小ピットがあり、用途の一端を窺がえる。また、大型の方形土壤は、小型住居と大差がないが竈の付設がなく住居と区分したが、その機能は不明である。

5号土壤 SK-05 (Fig. 10)

5号土壤は、調査区南端にあり、2号住居と6号住居の間に位置する4号住居の南壁を切っている。平面形は、長辺が200cm、長辺が232cmの楕円形プランをなす。北小口壁側には、幅が20cmほどの半月形のフラット面が付く2段掘りの構造をなし、壙底はやや深い凹レンズ状を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は1段目のフラット面までが24cm、壙底までは49cmと深い。覆土は、黄褐色粘土粒を含む暗黒茶褐色土で、土師器や須恵器の甕・壺蓋・高环片がわずかに出土した。

11号土壤 SK-11 (Fig. 20・31 PL. 10・19)

11号土壤は、調査区の南東部にあり、西壁は10号住居に削平されている。平面形は、南北長が250cm、東西長が260～300cmの方形プランをなす。壁面は、緩やかに立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなしている。緩傾斜する壁面の深さは30～35cm。東壁側の壙底には、直径が110～120cm、深さが15～25cmの円形プランの大きなピットが連なって掘り込まれている。覆土は、10号住居と大差ない黒色土であるが、黄褐色粘土粒をわずかに含んでいる。遺物は、須恵器壺・高环・壺蓋のほかに土師器甕や皿が出土した。

33・34は、高台付の須恵器壺。33は、口径が17.6cm、高台径が11.8cm、器高は6.6cm。体部はストレートに外反し、体部と内底面はヨコナデ、外底面はヘラケズリ。壺付は、V字状に内外方に跳ね上がる。胎土は良質で、微細～細砂粒と若干量の小～中砂粒を含む。やや軟質で、淡灰白色。34は、高台径が15.4cm。水平な壺付は、内唇を小さく内側上方に摘み出している。35は、口径が22.5cmの須恵器高环。口縁部は、内側する体部から緩やかに屈曲して垂直に立ち上がり、水平に整えた上縁は外方に摘み出す。胎土は精緻で、微細～細砂粒を含む。36は、須恵器の壺で、口径は16cm、器高は16.6cm。「く」字に外反する口縁部は、水平に整えた端部は小さく外傾する。胸部は、肩の張った偏球形をなす。37は、口径が35cmの須恵器甕で、胸部の上位には輪状の把手が付く。「く」字状に外反する口縁部は、緩やかな段を作つて垂直に立ち上がり、端部は小さく外方に摘み出している。口縁部はヨコナデ、胸部は叩き調整で、外面は格子目文、内面は青海波文。胎土は精良で、焼成は堅密。38は、長さが2.58cm、基部幅が1.73cm、重さが0.8gの黒曜石製打製石鐵。表裏面ともに丁寧な押圧剥離加工で仕上げ、基部には抉りは入る。断面形は凸レンズ状をなし、最大厚は0.28cm。

14号土壤 SK-14 (Fig. 30・32 PL. 14・19・20)

14号土壤は、調査区の中央部西寄りに位置する大型の土壤で、4mほど東には12号住居がある。平面形は、長辺が300cm、短辺が230cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-36.5°-Wとする。緩やかに立ち上がる壁面は、深さが45～50cmと深い。凹レンズ状をなす壙底は、壁下から壙央まで15～20cmの比高差がある。また南壁下には、直径が20～25cm、深さが20～24cmのピットがあるが対面する北壁側には穿たれていない。覆土は、黄褐色粘土粒やプロックを含んだ暗黒茶褐色土の単一層で、須恵器甕・壺・壺蓋や土師器甕・鉢・碗・壺のほか移動型竈片と石鐵が出土した。規模的に10号住居や13号住居と大差がないが、床面や壁面に被熱痕がなく住居とは断じ難い。

39・40は、須恵器壺蓋。低い天井部は、水平でボタン状の扁平な摘みが付く。体部は内側して立ち上がり、口縁部は垂直に下方へ摘み出す。天井部がヘラケズリ、体部がヨコナデ、内天井部はナデ。39は、口径が15.2cm、器高は2.1cm。精良な胎土には微細～細砂粒と若干量に石英小砂を含む。外

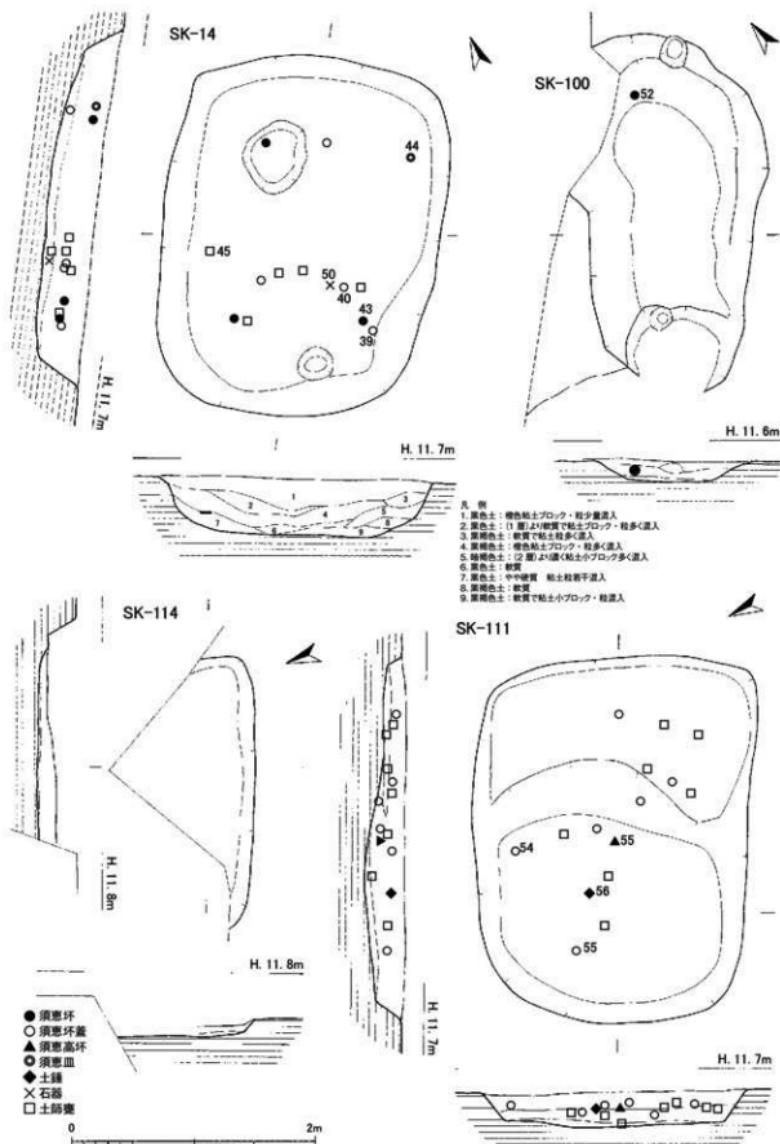


Fig. 30 14・100・111・114号土壤実測図(1/40)

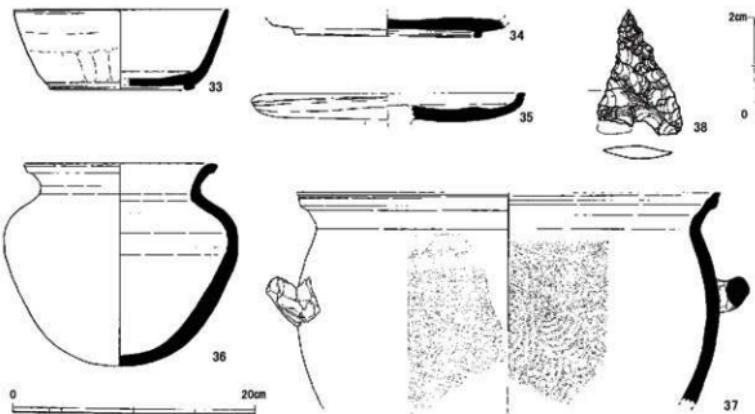


Fig. 31 11号土墳出土遺物実測図(1/1・1/4)

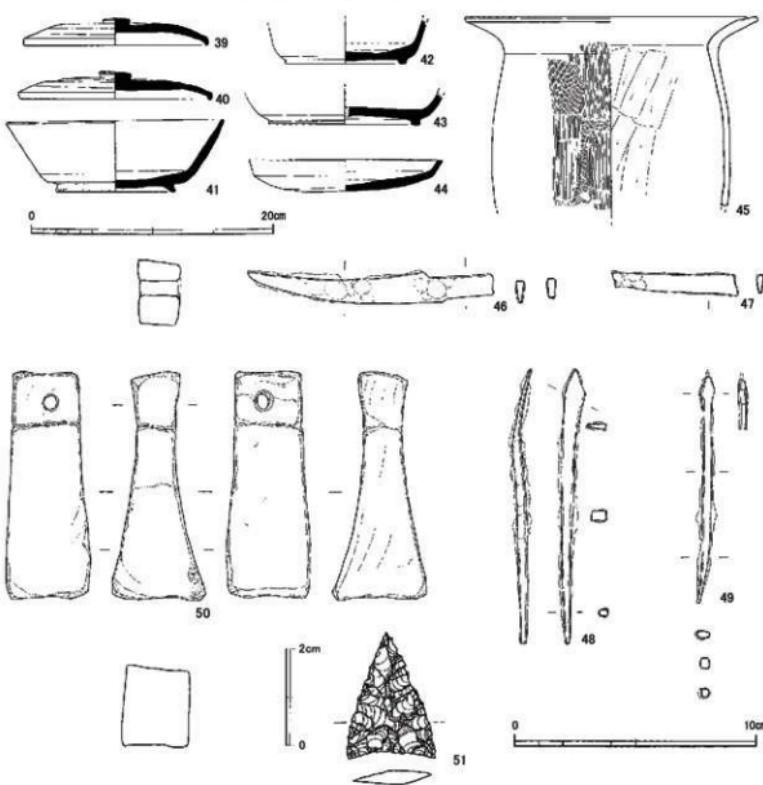


Fig. 32 14号土墳出土遺物実測図(1/1・1/2・1/4)

面は灰色、内面は淡灰色。40は、口径が16cm、器高は2.3cm。胎土は良質で、微細～小砂粒を比較的多く含み、焼成は堅緻。41～43は、高台付きの須恵器坏で、体部がストレートの外反するもの（41・42）と内彎ぎみに外反するもの（43）がある。41は、口径が18cm、器高が5.9cm。疊付は、水平で外唇は小さく外方に摘み出している。外底面はヘラケズリ、内底面はナデ、体部はヨコナデ調整。胎土は精良で、焼成は堅緻。灰色。44は、口径が16cm、器高が2.6cmの須恵器皿。底部は、浅い凹レンズ状をなし、口縁部は短くストレートに外反する。外底面は、板状工具によるカキ目状のナデ、内底面はナデ、口縁部はヨコナデ。45は、口径が24.2cmの土師器甕。口縁部は、長胴形の胴部から大きく「く」字状に外反する。外面は、幅が1.5mmのやや細かいタテハケ目、内面は搔上げ状のヘラケズリ。胎土には、微細～小砂粒や雲母と赤褐色粒を含む。内面は淡明橙色、外面は淡黄橙色。46・47は刀子。46は刃部長が8.1cmで断面形は逆三角形をなす。背厚は0.36cmで凹レンズ状に反る。刃部の闇は浅い。48は長さが10.3cmのヤリガンナ。刃部長は1.75cmで背は山形をなしている。49は、長さが9.17cm、刃部長が1.07cmの三角形鎌。刃部は菱形をなし、茎の先は彎曲している。50は、石英斑岩の手持式仕上げ砥石。基部には直径が5～6mmの円孔が穿たれ、表面の円孔は竹管状の段をなしている。底面は4面で、表裏面は先端部からの研ぎ込みが著しく、断面形は緩やかな凹レンズ状のカーブを描く。長さは9.31cm、重さは113.8g。51は、黒曜石製の打製石鐵で、長さが2.6cm、基部幅が1.85cm、最大厚が0.3cm、重さは1.1g。表裏面には押圧剝離加工を施し、断面形は菱形をなす。

15号土壙 SK-15 (Fig. 33 PL. 16)

15号土壙は、調査区の北東隅に位置し、南5mの距離には9号住居がある。平面形は、長辺が190cm、短辺が160cmの隅丸長方形プランをなす。主軸方位をN-12.5°-W。壁面は、はじめ緩やかに傾斜して窄まるが、鋭く屈曲した後に垂直に掘り込まれている。壁高は96cm。壙底は、中央部が緩やかな凹レンズ状をなし、壙央には直径が16～18cm、深さが6cmの小ビットがあり、落し穴的機能が想起される。覆土は上層が黒色土層、中～下層は黄褐色粘土粒を含んだ暗黒茶褐色土層である。

85号土壙 SK-85 (Fig. 33 PL. 15)

85号土壙は、調査区の南西部に位置し、北へ3mの距離には12号住居がある。平面形は、直径が160～170cmの円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は10cmと浅い。壙底は浅い凹レンズ状をなすが、西壁側には平面径が45～85cm、深さが10cmほどの楕円形ビットが、また東壁下には直径が35～43cm、深さが12cmのビットがある。覆土は暗黒茶褐色土の單一層で、遺物は土師器甕と須恵器坏ほかに移動型竈片がわずかに出土した。

100号土壙 SK-100 (Fig. 30・34 PL. 19)

100号土壙は、調査区のほぼ中央部に位置し、南へ4mの距離には13号住居がある。西小口壁は擬乱壙によって消失しているが、平面形は短辺が145cm、長辺が320cmの不整な楕円形をなし、北壁が小さくL字状に張出す。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は20cm。覆土は、黄褐色粘土粒を含んだ暗黒茶褐色土の單一層で、土師器甕や須恵器甕・坏・坏蓋片がわずかに出土した。

52は、口径が13.4cm、高台径が9.7cm、器高が4.1cmの須恵器坏。体部は小さく反りながら立ち上がり、高台の疊付は水平に仕上げている。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面は回転ヘラケズリ。胎土は良質で、多くの微細～細砂粒と少量の小砂粒を含む。外面が灰色、内面は灰黄色。

110号土壙 SK-110 (Fig. 33 PL. 17)

110号土壙は、調査区の西端に位置し、東には同形状の112号土壙と大型の111号土壙がある。平面形は、長辺が118cm、短辺が94cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-18°-Wにとる。

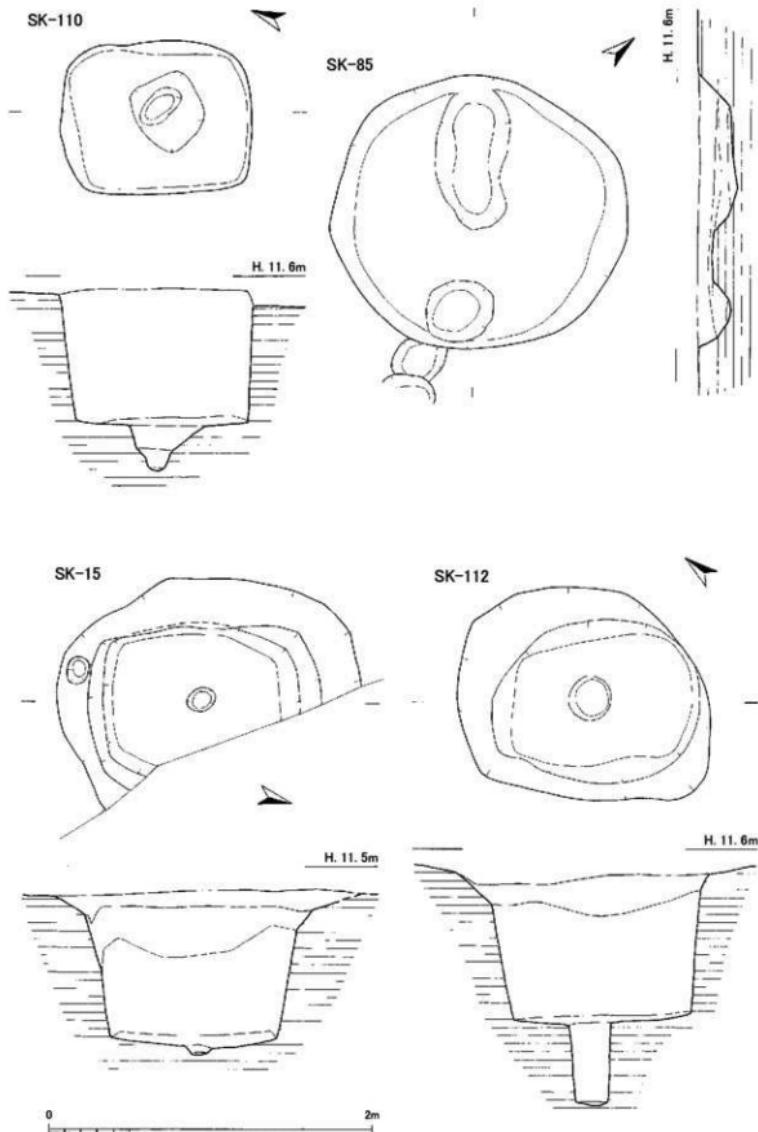


Fig. 33 15・85・110・112号土壤実測図(1/30)

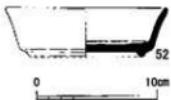


Fig. 34 100号土壙
出土遺物実測図
(1/4)

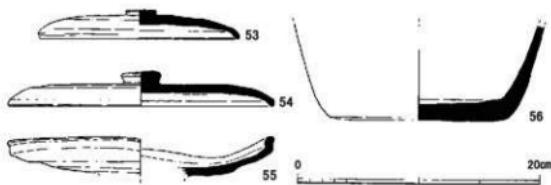


Fig. 35 111号土壙出土遺物実測図 (1/4)

壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は83cm。壇底は浅い凹レンズ状をなし、壇央には40~45cm、深さが28cmの方形をした2段掘構造のピットが掘り込まれている。壇央にピットを掘り込む構造は15・112号土壙と共に、落し穴の機能が想起される。覆土は、黒色土～暗黒茶褐色土層が凹レンズ状に互層をなし、土師器甕・須恵器甕・壺・壺蓋片がわずかに出土した。

111号土壙 SK-111 (Fig. 30・35 PL. 15・19)

111号土壙は、調査区の北西部に位置する東西軸の大形土壙で、すぐ東には112号土壙が、また西へ4m距離には110号土壙がある。平面形は、長辺が300cm、短辺が227cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN-65°-Wにとる。壁面は、東側を一旦掘り込んでフラット面を作り、更に西半部を10~12cm掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。壁面は東壁側を除いてはやや緩やかに立ち上がり、壁高は1段目の東側で10~15cm、2段目の西半部は21~31cmで、最深部の標高は11.22mである。1段目の床面は平坦であるが、北壁に向かってやや緩やかに傾斜する。一方、2段目の床面は、中央部が浅く窪む凹レンズ状をなしている。また、東壁の南寄りで20cm大の灰白色粘土塊を検出したが、壁面や床面に被熱痕がなく住居の可能性は考え難い。覆土は、概ね黑色土の単一層で、下層には黄褐色粘土粒が混入していた。遺物は土師器や須恵器の甕と壺蓋が比較的まとまって出土した。

53・54は、天井部にボタン状の摘みが付いた須恵器壺蓋。体部は、ストレートな天井部から内彎ぎみに立ち上がる。天井部がヘラケズリ、内天井部がナデで体部はヨコナデ。54は、口縁端部を垂直に摘み出し、口径は22cm、器高は3.8cm。胎土は精良で、微細～細砂粒と若干量の小砂粒を含む。焼成は半焼け状の軟質で、乳白色～淡黄褐色。53は、口径が16.5cm、器高は2.5cm。胎土は精良で、微細～細砂粒と雲母微細を含む。生焼けで、色調は明橙～淡明赤橙色。56は、口径が22cmの須恵器高環で、器形の歪みが著しい。底部と体部の境にはシャープな段を作る。口縁部は、内彎ぎみの体部から鋭く屈曲して垂直に立ち上がり、端部は小さく水平に摘み出している。口縁部～体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。良質な胎土には微細～細砂粒を比較的多く含む。56は、底径が14.6cmの須恵器甕。胎土は精良で、微細～細砂粒を含む。軟質。

112号土壙 SK-112 (Fig. 33 PL. 17)

112号土壙は、調査区の北西部に位置し、すぐ西には大型の111号土壙がある。平面形は、長辺が155cm、短辺が131cmのやや不整な隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-40°-Wにとる。壁面は、上縁で一旦緩やかに屈曲した後に垂直に立ち上がり、壁高は90cm。壇底は浅い凹レンズ状をなし、壇央には直径が25cm、深さが52cmの深いピットが掘り込まれている。構造的には15・110号土壙と同じで落し穴の機能が考えられる。覆土は暗黒茶褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

114号土壙 SK-114 (Fig. 30 PL. 16)

114号土壙は、調査区の北端に位置し、すぐ西には113号住居跡がある。大半が調査区外に抵がり平面形は明らかでないが、一辺が240cmほどの方形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、

壁高は15cm。墳底は平坦で、墳央へむかって緩やかな凹レンズ状をなす。覆土は暗茶褐色土の単一層。

5 その他の遺構と包含層の遺物

発掘調査では、住居や掘立柱建物、土壙のほかにひとつつの遺構として把握できなかつた柱穴を検出した。これらの遺構や搅乱坑から石器や鐵器などが出土した。

出土遺物 (Fig. 36 PL. 20)

57は、43号ピットから出土したU字状の鐵製品。断面形は基部が厚く、先端部が薄い長方形をなす。58は、44号ピット出土の方形鐵。幅が2.96cmの刃部は緩やかな凸レンズ状をなす。長さは6.55cm、基部幅は1.7cm。59は、116号ピット出土の柱状片歯石斧。磨耗による損傷が著しい。現長は10.7cm、幅2.85cm、厚さが2.85cm、重さは107.9g。60は、平基式打製石鐵で、長さは2.3cm、基部幅は1.2cm、重さは0.9g。表裏面には押圧剥離加工を加え、レンズ状をなす断面形の厚さは0.3cm。

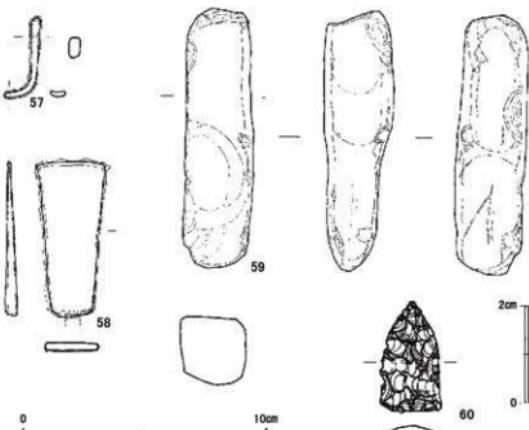


Fig. 36 ピット出土遺物実測図(1/1 · 1/2)

III. おわりに

本調査では、奈良時代の竪穴住居12棟と掘立柱建物2棟、土壙11基のほかに多数の柱穴を検出した。このうち竪穴住居は、規模的に一辺が4m余のもの(SC-01・02・06・09・12)と2m余のもの(SC-04・10・13)のものに大別され、一定の距離を保って位置している。これらの住居には南壁を除く三方に竈を付設しているが、位置的には壁央ではなく、どちらかの隔壁に寄って構築されている。この規模や竈の付設位置などの違いが直ちに時期的な差異に繋がるかは即断し難いが、幾期かにわたって集落域が営まれたことは云える。また、9号住居を除いて主柱穴は検出できなかつた。これは雑餉隈丘陵に拠がる遺跡に特有な事象で、その要因の検討が必要である。次に、掘立柱建物は2棟を検出したが、調査区外に拠がるためにその規模は定かではない。同時に、SC-06とSC-12およびSK-14を結ぶ矩形のエリアに不確かながら柵列状に並ぶ柱穴群がある。住居、掘立柱建物、柵列?の3者が関連性の検討も必要である。最後に、土壙のうち墳央に小ピットを有するものは、「落し穴」的機能が想起されるが、遺物が皆無なことから時期的な判断はし難いが、住居群と異なることも有得る。紙面の都合上詳細な検討は加え得なかつたが、雑餉隈丘陵を俯瞰した上で再検討を加えたい。



1) 調査区全景(北東から) CG合成



2) 調査区東側全景(南東から)



1) 調査区東側全景(北東から)



2) 調査区西端部全景(北東から)



1) 1号住居(西から)



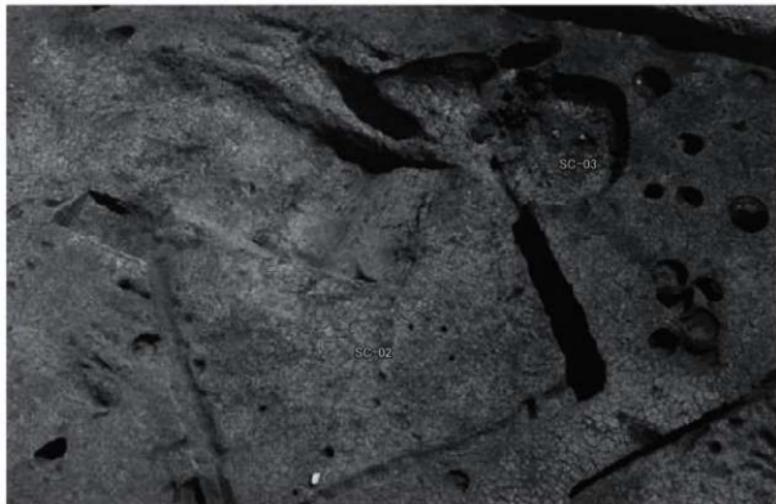
2) 1号住居竈(南西から)



1) 1号住居竈断面(南西から)



2) 1号住居竈完掘状況(南から)



1) 2・3号住居(西から)



2) 2号住居(西から)



1) 2号住居竈(南から)



2) 3号住居(西から)



1) 4号住居・5号土壤(西から)



2) 4号住居(西から)



1) 6号住居(北から)



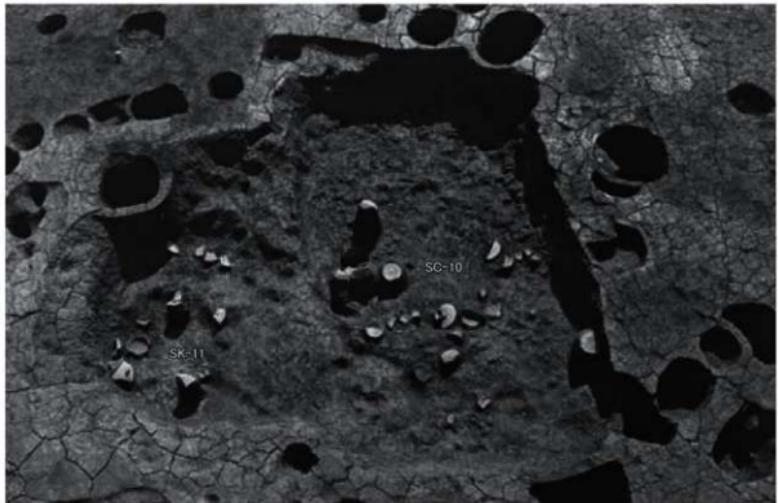
2) 6号住居竪穴状況(南から)



1) 9号住居(南から)



2) 9号住居竪完掘状況(東から)



1) 10号住居・11号土壠(東から)



2) 12・13号住居(西から)



1) 12号住居竈(西から)



2) 12号住居竈断面(西から)



1) 13号住居(東から)



2) 13号住居竈(南西から)



1) 13号住居竪完掘状況(南から)



2) 113号住居(西から)



1) 109号堀立柱建物(西から)



2) 14号土壤(北から)



1) 85号土壤(西から)



2) 111号土壤(西から)



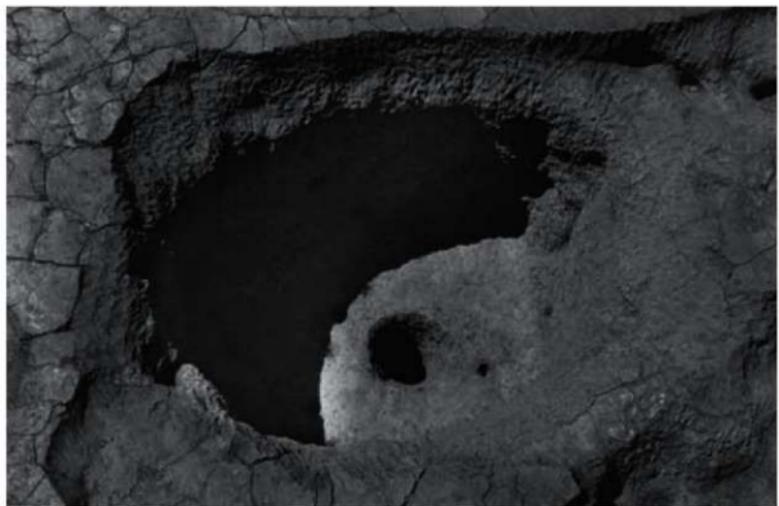
1) 114号土壤(北から)



2) 15号土壤(北から)



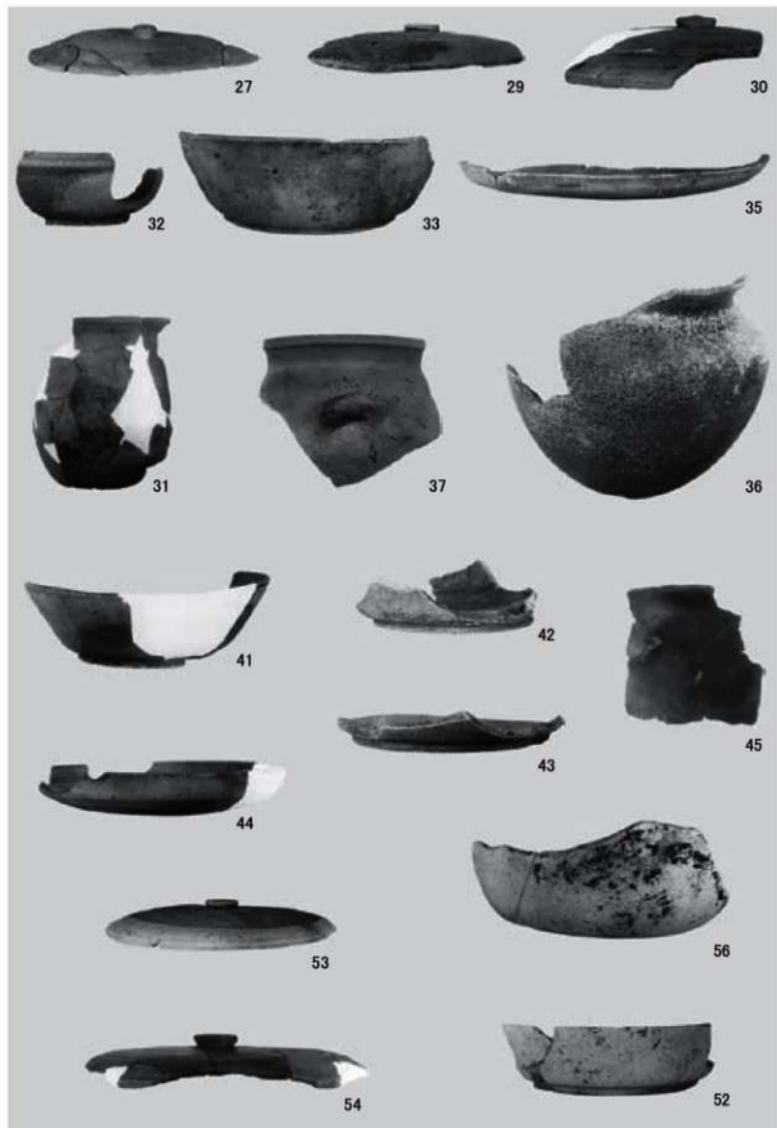
1) 110号土壤(南から)



2) 112号土壤(東から)



出土遗物 1 (缩尺不同)



出土遺物2(縮尺不同)



出土遺物 3 (縮尺不同)

報告書妙録

ふりがな	なかのはらいせき							
書名	中ノ原遺跡							
副書名	-中ノ原遺跡第5次調査報告-							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1195集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中ノ原遺跡 第5次調査	福岡市博多区 西春町4丁目1番	40132	2816	33° 32' 17"	130° 27' 52"	20110201 ~ 20110416	793m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中ノ原遺跡	集落	奈良時代	竪穴住居 挖立柱建物 土壙	土師器 須恵器 石製品 土製品	鐵器	竪穴有する 住居群		
要約	中ノ原遺跡は、春日市と大野城市に挟まれた福岡市のもっとも南に位置し、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川の間を北へのびる春日丘陵の東に並行する帷櫛隈から麦野の丘陵上に立地している。地形的には、鳥居ローム層を基盤層とし、諸岡川などの開削による谷が幾筋も嵌入して小さな低丘陵を形成している。中ノ原遺跡は、この幾筋の谷から麦野へと北へと伸びる帷櫛隈丘陵の南端に位置する。この低丘陵上に位置する第5次調査では、竪穴住居12棟と掘立柱建物2棟、土壙11基のほかに多数の柱穴を検出した。このうち竪穴住居は、規範的に二大別され、各々に竪穴に付設されている。竪穴は、壁面の中央部ではなく、どちらかの側壁に寄った位置に付設されている。これらの住居は、南北に並ぶように位置し、その西側には住居の位置しない空域があり、広場的空間の存在が想起される。6号住居と12号住居および14号土壙は、L字状に結ぶエリアに1ないし2列の棚状の柱穴群があるが、定かなことは判断できない。土壙には、小型のものと大型のものがある。このうち、壙底に小ピットが掘り込まれた小型土壙は、落し穴と考えられる。また、大型の長方形プランのものは、規範的に小型の住居と大差ないが、竪穴がなく、住居と区別したがその機能は明らかでない。							

中ノ原遺跡

-中ノ原遺跡第5次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1195集

2013年(平成25年)3月22日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 (株)九州カスタム印刷

福岡市博多区東比恵3-16-15

